



JSSH NEWS

日手会ニュース

2002年 8月31日 第19号

発行：日本手の外科学会
広報委員会

第45回日本手の外科学会を 振り返って

第45回日本手の外科学会
会長 吉津孝衛

目次

第45回日本手の外科学会を振り返って
第5回APFSSH会長に就任して
Hand Surgery編集長に就任して
2002年度IFSSH代表者会議報告
香港トラベリングフェロー報告記
新名誉会員のご挨拶
新Corresponding Memberの紹介
新評議員自己紹介(五十音順)
お知らせ = 学会案内 =
編集後記

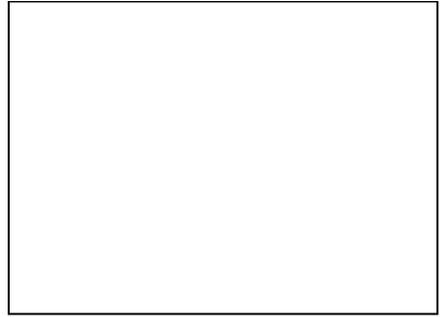
田島達也先生の第15回(1972年)から30年ぶりの新潟で、第45回日手会学術集会が4月11日～13日の3日間、桜吹雪のなかで新潟市民芸術文化会館、新潟市音楽文化会館で開催されました。

演題募集は全てインターネットで行い、例年に比べ約1カ月早い開催で、募集時期も早くなったため、どの位集まるのか不安でした。しかし逆にオンラインであるために締め切りを遅くできたこと、論文分類の臨床研究部門を従来の20から51に細分類したため、演題分類が容易となったこと、さらにプログラム委員を12人から51人とし、オンライン査読を行ったこと等から、大幅に時間の短縮が可能となりました。このため最終的に372題もの応募を戴き、できるだけ多くの会員が発表できるよう多施設より採用することに努め、さらに会員の拡がり期待して約90%にあたる335題を採用させて戴きました。このため、能楽堂まで使用しなければならない等、6会場となってしまいましたが、新潟の酒に惹かれたせいばかりとは思いませんが、1260人の参加を数えたことをご容赦ください。

特別講演、招待講演は大勢の聴講となり、大会場を準備した甲斐があったといえます。生田義和先生はアイデア、基礎研究の積み重ねの重要性、鉄腕アトムの世界が現実となってきているように夢を大きくと鼓舞され、石井清一先生は指屈筋腱の修復の概念を変えた、in vitroでの腱の自己修復能の確認の1974年の輝かしい時代の考え方を背景に、癒着の制御の重要性を述べられました。Gelberman先生も膨大な腱の実験を中心として歴史を述べ、縫合材料の開発、遺伝子治療の可能性、癒着、縫合の制御等について、Lundborg先生は神経損傷の後根神経節の細胞死あるいは逆に運動神経再生等に対する制御の問題、tissue engineering法を用いた人工神経の開発、幹細胞の利用、知覚再教育、電動義手へのmicrochipsの利用など、幅広い将来展望を述べられました。開 祐司先生は実験的にin vivoにおける骨髄未分化細胞(軟骨幹細胞)へのFibroblast growth factor-2, やChondromodulin 1等による一連の硝子軟骨再生への分化制御機序についての内容でありました。

今学会のテーマは、20世紀における手の外科を総括することにより将来を展望する場となるように、「21世紀へのお土産と挑戦になりうるか」でありました。シンポジウムでは「本当に良いのか相対する治療法を考える」として8疾患に対し、それぞれ2種類の手術法を提示しました。多少ディベート的

な手法で両手術法の本当の適応を明確にすることであり、目的は達したものだと思います。PIP関節内骨損傷への再建法を挙げましたが、長期例が想像以上に良好で適応も明確になったと思います。屈筋腱自動屈曲・伸展療法もGelberman先生のcommentもありましたが、会場での挙手からみると、まだまだこれからの感がありました。ビデオにより指尖切断被覆への一般的な方法を提示し、適応、手術法のポイントが良くわかったと思います。人工神経開発への熱い想いは発表、討論共に全員がPCで行う初めての



形式をとりました。短い時間でもvisual面を最大に使用する利点が駆使され、座長・演者に感謝いたします。ランチョン・セミナーも大きな成果が得られました。医療体制の大変換期における8人の開業医の先生方の手の外科への想いは感動的で、患者とのcommunicationのためにも手の外科専門医制度の必要性が語られました。一方、中村純次先生の保険診療のup to dateな話しは、現在の医療情勢の問題点を的確に指摘されました。開館使用規制のため、大きな会場が使用不能でご迷惑をおかけしたことを深謝いたします。イブニング・セミナーとして、今後の手術法の主流となるであろうminimum invasive surgeryの経験豊かな佐々木孝、土井一輝両先生からのアドバイス、手指の変形・拘縮に対する基本的な考え方を中心に講演していただいた薄井正道、藤 哲両先生、トピックスとなるであろう

TFCC、手根骨すべてに関連する不明確なDRUJ不安定症への考え方を解説して下さった中村俊康、木原 仁両先生に御礼を申し上げます。また今回は、基礎演題は全て展示にさせて戴き、10題がまず各座長の先生から選定され、その中から最優秀展示賞として、近畿大学形成外科の磯貝典孝先生の「Tissue engineeringによって作製された指骨の微細構造および分子生物学的解析」が選ばれました。おめでとうございます。今後の更なる発展を希望いたします。

335題が新潟の地で熱く検討された余韻がまだ冷めやらぬうちに、中村蓼吾先生主催の第46回日本手の外科学会への足音が次第に大きくなってきております。最後に絶大な助力を戴いたヒズ・ブレインに感謝いたします。

第5回APFSSH会長に就任して

生 田 義 和

アジアで活躍している手の外科医の学会活動拠点を作るために、日本手の外科学会を中心にして作業が進められ、平成9年に第1回アジア太平洋手の外科学会が開催された。この学会の成立には、日本手の外科学会、中でも特に田島達也先生らのご尽力があったが、その成立までの理由のひとつとして、国際手の外科連合への参加資格の問題があったように記憶している。すなわち、日本や韓国のように、その国の手の外科学会がある程度の会員数を擁して入る国では、その学会が一つの単位となって連合に参加することが出来るが、数人しか会員がいない国は、国際手の外科連合への加入が出来ないなどの問題である。しかし、田島先生が会長をされた平成9年のオーストラリアのパスでの第1回から、平成11年シンガポールでの第2回、平成12年のインドのチェンナイでの第3回と会を重ねるにしたがって参加者も多くなり、平成14年ソウルでの第4回目の学会では14カ国から100名以上の発表者とヨーロッ

パヤアメリカ合衆国を含めて20以上の特別講演がプログラムに組まれた盛大な国際学会に発展し、今やアメリカ手の外科学会やヨーロッパ手の外科学会に次ぐ国際的組織へと成長している。

さて、この度日本で、来る平成15年11月27日(木)から29日(土)までの3日間、大阪国際交流センターにて開催することになり、図らずも会長という大任を仰せつかりました。前述のごとき歴史もふまえ、日本手の外科学会の全面的なご支援の下、特別な準備委員会を結成していただき、この委員会を中心に精力的に準備をしているところであります。プログラムでは、まだ最終決定ではありませんが、スポーツ外傷、皮弁、骨折、内視鏡手術、先天異常などのほか、腕神経叢麻痺、感染などを含めてアジア特有の手の外科も取り上げたいと考えています。皆様の積極的なご参加を組織委員会一同でお持ちいたしておりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

Hand Surgery 編集長に就任して

生 田 義 和

さて、この度Hand SurgeryのEditor in Chiefという大任を仰せつかりました。この雑誌は、1995年に創刊され、現在は第6巻が発行されつつあるところです。長い間香港のDr. S.P.Chowが編集作業をしてこられました。学会員を最も多く擁し、学会活動も活発な日本手の外科学会で編集作業をしてほしいとの要請を受けて、理事会で検討した結果、日本手の外科学会の事業の一つとして引き受けることとなりました。その後新たに編集委員会を立ち上げた理事会で検討してきたところであります。この雑誌は現在のところ6月と12月の年2回の発刊ですが、内容は豊富であります。たとえば昨年2001年第2巻の内容を少しご紹介いたしますと、原著6編、シンポジウム4題、review 2編、症例報告6編、であります。ちなみにEditorialには山内裕雄先生が「日本の手の外科」を執筆されておられます。今後、日本手の外科学会のご支援を仰ぎながら、編集委員の方々の献身的なご助力によりましてこの雑誌の将来の発展に向けて努力したいと思っておりますので、皆様の積極的なご参加をお願い申し上げます。

2002年度IFSSH 代表者会議報告

山 内 裕 雄

2002年5月22 - 23日の両日、AmsterdamにおいてIFSSH理事会 および各国代表者会議が開催されましたので、かいつまんでご報告します。

- 1 Foucher理事長報告：委員会活動をWebsiteで行う。その事務費に月およそ200ドルかかる。これは1年を試行期間として承認された。
- 2 Mennen次期事務局長報告（Urbaniak事務局長所用で欠席のため代理）：
 - 1) チェコとスロバキアの2国の学会が正式に加入承認され、48 Societiesとなった。名簿作成のため各学会から情報を求めているが、14学会からしか来ていない。会長などは流動的なので、各学会

の恒常的責任者の連絡先を求めたい(この点では日本は問題ない)。

- 2 第8回イスタンブール大会は大成功であり、その余剰金55,871ドルがIFSSHに寄付された。これは今までの学会中最高額であり、EGE会長に感謝する。また山内理事長の3年間のリーダーシップを高く評価したい。
- 3 第9回ブタペスト大会の準備状況(Co-chairman Dr. Szaboが説明): 2004年6月13 - 17日ブタペストで開催する。1st Announcementは送付済。今後ホームページ(www.ifssh2004.com)で情報を流す。RegistrationやAbstract送付もオンラインで行う。学会での発表もPCのみとしたい。そのため学会前にCDを送付してもらい準備する。これに対して山内は日本ではまだマック愛用者が多いので、それも受け付けるように依頼し快諾を得た。会場費は期日前・期日後・当日を450, 550, 650ドルとしたい。これに対して期日前を400ドルにという要望と招宴などに追加金をとらないようにとの希望が理事長から出された。この大会の宣伝のために、会長のRennerとSzaboが来年大阪で行われるAPFSSHに来日する。Post-CongressをルーマニアのVata(ブタペストから350キロ・バスを仕立てる)という保養地で6月18 - 21日行う予定とのこと。
- 4 第10回シドニー大会: 2007年3月11 - 15日に開催予定。
- 5 第11回大会: いまのところソウルが名乗りを挙げている。2004年ブタペストでの代表者会議で決定の運びとなる。
- 6 Pioneers of Hand Surgery: Vancouver, Istanbulで表彰されたPioneersにさしあげるCertificateがやっとできた、近々送付の予定である。次回Budapest大会で表彰するPioneers候補者(70歳以上で、国際的な貢献がある人)を各学会から推薦して欲しい。
- 7 Historian 永いことSwansonがやっており、これをLambに代わってもらったが、他界されたため、Cooneyを臨時のHistorianになってもらった。
- 8 会則変更 委員会の編成がかなり変わったので、それを含めてBy-lawの変更案を事務局で考えておく。
- 9 次期代表者会議 2003年6月25 - 28日に行われるリスボンでのEFSSH時に開催予定。

以上です。いろいろな国の学会で構成されているために、会費納入など事務的処理がいつも大変です。この点、日本はまことに優等生で、いつも鼻を高くしていられます。会員諸氏と事務局のかたがたのお陰であります。

香港トラベリングフェロー報告記

慶應義塾大学整形外科
中村俊康

平成14年度日本手の外科学会 - 香港手の外科学会交換フェローシップに選んでいただき、一昨年度の内山茂晴先生、昨年度の副島 修先生に続いて第3回目の交換フェロー(香港ではJapanese ambassadorと呼ばれます)として平成14年5月27日から6月2日まで香港に行っていました。香港手の外科学会は大所帯の日手会と異なり、メンバーが全員で120名程度、そのうち手の外科に専従しているのは大学教授であるProf. SP Chow, Prof. PC Leungの2人だけで、ほとんどが普通の整形外科医として仕事をしているそうです。今年度の学会長はPamela Youde Nethersole Eastern Hospital(舌を噛みそうですが)のDr. Wuで、総勢15名のスタッフで2日間の学術集会和1週間にわたるサテライトプログ

ラムをこなしていました。毎年メインテーマを掲げて学会の運営を行うのが特徴で、それにあわせて外国からゲストを招いています。今年のテーマは Microsurgery in limb reconstruction で、Dr. Foucher, Dr. Bishop, 中国本土から Dr. Cheng, Dr. Hou を招待し、マイクロに関連した手術デモをサテライトプログラムとして学術集会前5日間で行いました。さらにアジアからの Scholar として中国本土から4名、インドから1名、日本から同窓の奥山訓子先生が参加されました。また、通年のプログラムと異なり前の週の24, 25日に Flap course を、学術集会終了後の6月4, 5日に上海に飛び、中国本土との合同会議が行われました。さて私の行動はという

と、香港到着翌日から朝7時30分集合で香港中の病院 (Queen Mary Hp, Queen Elizabeth Hp, Prince of Wales Hp などを訪れました) を回り、朝から飲茶、午前中手術見学、昼飲茶、午後ディスカッション、夜会食を毎日こなしました。学術集会も一会場、規模的には日本の集談会程度ですが、活発で妥協しないディスカッションの応酬はかなりの迫力があり、大変勉強になりました。私は学術集会に1題、サテライトで2題の口演を行い、それなりに反響があったようです。このような貴重な経験を得る機会を与えていただいた日本手の外科学会、生田理事長、別府国際担当理事、南川国際委員長に感謝の意を表し、報告記を終えることといたします。ありがとうございました。

(写真はゲストの Dr. Bishop, 私, Dr. Foucher, 会長の Dr. Wu で、学会場で撮影しました)

新名誉会員のご挨拶

名誉会員に推挙されて

札幌医科大学名誉教授
石井清一

この4月の総会において、日本手の外科学会の名誉会員に推挙されましたことを、大変光栄に思っております。私が手の外科の勉強を始めたのは昭和41年で、大学院を卒業した年であります。大学院での研究テーマは骨腫瘍の細胞学でしたが、恩師島 啓吾教授の、今後は北海道にまだ普及していない手の外科をやるようにとの一言がきっかけでした。

わが国で初めての手の外科のまとまった書物として、津下健哉先生の「手の外科の実際」が世に出たのは、昭和40年であります。私はこの本を、始めから終わりまで3回通読して、手の外科の原則と考え方を津下先生から教えていただきました。その後私は、昭和43年から1年間、ニューヨークのコロンビア大学附属病院に留学し、R.E.Carroll先生から手の外科を直接学ぶ機会を得ました。その頃、京大の上羽康夫先生がCarroll先生の許から帰国され、手の外科の若手のリーダーとして活躍しておられました。留学に際して親身のお世話をいただいたことを、今でも感謝しております。このように振り返ってみますと、私の手の外

科は、何人かの恩師や先輩によってきっかけを作っていただき、育てていただいたことになります。

今後は、札幌医大と一緒に手の外科をやっていた薄井正道先生が釧路に手の外科研究所を設立したのを機会に、そこのお手伝いをするようになりました。私の身近にいる若い医師が手の外科に興味を持つように、また手の外科医として育つように努力することが、私を育てて下さった恩師や先輩への恩返しになるのではとっております。

手の外科とウルトラマイクロサージャリー

大阪市立大学大学院名誉教授
山野慶樹

医師になって何故“手の外科”をやり出したか人皆それぞれに思いがある。入局当時手の外科手術の多くがday surgeryで、Kulenkampff鎖骨上窩伝達麻酔で肩関節以下に効き有用であった。この麻酔の合併症気胸（文献でも数%以下に起る）を起さない方法を解剖学的に考案し繁用している。

手の外科手術の助手は新入医局員が勤めることになっていたが、術者は厳しく術中怒鳴られるばかりで皆が敬遠し、私が何となく貧乏くじを引いていたが、おかげで手の外科のノウハウを研鑽でき、今に感謝している。

当時大学には手術顕微鏡がなく、母指の不全切断症例を顕微鏡を購入した関連病院につれて行き、再接着したがのが昭和46年であった。手の外科では、末梢神経の電気生理学検査から慢性神経障害の分類、再接着（小児，母指，難治例），PIP関節損傷・肋軟骨移植，TOSなどを主テーマとした。電気生理学的にneuropraxialは最長6週間で、慢性の神経麻痺には否定的である。

本格的にマイクロサージャリーを行い出したのは設備の整っていた川崎医大に移ってからで、肢指切断再接着は後発であったが、その頃指尖部再接着は動脈吻合が不能で再接着の適応とはならないが定説であった。指尖部切断例は多く、血管は細いが吻合できることを症例をまとめて、確か昭和53,4年頃手の外科学会に報告したが、こんなところの再接着に時間と金をかけるものでないとか批判的で、再接着をやっている施設からさえ、composite graftでないかといわれたものである。常識化しているもの、不可能と思われるものを覆すことの困難さを感じたものである。この報告の後、マイクロの設備すらない開業医が指尖再接着のレセプトを出したり、再接着を強く希望する患者にインフォームドコンセントなしに断端形成したことなどよからぬ話を耳にした。1 2mm以下最小100 μ 径前後の細動脈吻合で、この部の再接着はマイクロサージャリーとレベルが異なることからultramicrosurgeryという語にしたが、近年評価されつつあるのはうれしい。ウルトラマイクロとは言わないまでも、21世紀の手の外科手術にはマイクロサージャリーや関節鏡などの素養をもって、よりatraumaticな手術で、患者のために美的に機能再建を目指してもらいたいものである。

新Corresponding Memberのご紹介

Hua Shan Hospital, Fudan University
Red Cross Society of China
Yudong Gu

Yudong Gu, male, born in October 1937. He was graduated from Shanghai First Medical College in 1961. Yudong Gu is Professor of Fudan University, PhD Advisor, Director of Department of Hand Surgery of Huashan Hospital, Director of Shanghai Institute of Hand Surgery, Chairman of the Chinese Medical Association for Surgery of the Hand, Editor-in-chief of Chin Journal of Hand Surgery, Chairman of Key Laboratory for Hand Function Reconstruction of Ministry of Health, Member of Chinese Academy of Engineering. Since 1978, about 250 papers have published in domestic and abroad journal.

新評議員紹介

新井 健 (あらい たける)

国立療養所村山病院整形外科

私は、1985年慶應義塾大学医学部を卒業後同大学整形外科学教室に入局し、臨床では、佐々木孝先生に3年余り師事しました。基礎研究では、内西、堀内、高山、仲尾先生等の指導の下、末梢神経の再生に関する研究を開始し、1997年からスウェーデンに留学しルンドボルグ 教授に師事しました。国立療養所村山病院は脊損病棟があり、麻痺手の治療に尽力したいと考えています。また、基礎分野でも、末梢神経の再生や修復、端側吻合などによる再生軸索の発芽などに興味があり、臨床に反映できるテーマを考案し、取り組んで行きたいと考えています。

池上 博泰 (いけがみ ひろやす)

慶應義塾大学整形外科

この度、日本手の外科学会の評議員に加えていただき大変光栄に存じております。私は昭和60年に慶應義塾大学を卒業後、整形外科学教室に入局いたしました。その後6年間の研修期間中に平塚市民病院で石黒 隆先生に出会い、手の外科に興味を持ちました。現在、慶應義塾大学整形外科で手の外科、肩・肘関節外科を含めた上肢の外科を守備範囲として診療しております。大学に籍を置く者として、若手医師や医学生が一人でも多く手の外科に興味を持ってくれるよう努めております。

日本手の外科学会発展のため、微力ながら精一杯努力して参りますので、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

池田 全良 (いけだ まさよし) 東海大学大磯病院整形外科

日手会には1986年の第30回同学術集会から入会しました。その当時は教室の諸先輩の基礎的研究に参加し、その後の神経修復に関わる基礎研究を通じて自らマイクロサージェリーの研鑽を積みました。最近では、末梢神経の基礎研究などかなり先鋭的な発表もある一方で、一説には古典的な治療概念の一新など見直されるべき課題も多々あるようです。そんな中で毎年、数多くの研究成果が発信されますが、より質の高い学会と学会誌になることに一評議員として尽力したいと思います。

石川 浩三 (いしかわ こうぞう) 大津赤十字病院形成外科

私は昭和52年に京都大学を卒業し形成外科の研修を3年受けた後、整形外科の研修を4年受け、その後は形成外科に席をおいて再建外科を中心に診療を行って参りました。現在は大津赤十字病院で形成外科と手の外科を担当しております。いままで整形外科と形成外科の両科の先生方にお世話になってきましたので、手の外科領域において少しでも両科のレベルアップ、後輩指導のお役に立てれば幸いと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

稲田 有史 (いなだ ゆうじ) 奈良県立医科大学救急救命センター、救急医学

今回は、日本手の外科学会評議委員に選出頂きまして本当に光栄に存じます。私と手の外科の出会いは、学生時代にさかのぼります。私が久留米大学医学部在学中に、いずれ郷里の奈良医大整形外科に進みたいと論文を引いておりましたら、玉井先生の切断指・肢再接着術の論文を引き当てました。当時の整形外科の論文の中で、異彩を放つ内容にこんなことができるんだと感心したのを覚えております。その後、奈良医大整形外科に入局させていただき玉井 進名誉教授、福居先生、水本先生、矢島先生はじめ奈良医大手の外科の諸先輩方に実験・臨床の一から学び、The Hospital for Special SurgeryのDr.Weiland先生のもとに留学し、今日があります。現在、救急医と手の外科医の2足の草鞋をはく極めて珍しい医者になってしまいましたが、これまでお世話になった先生方への恩返しのためにも、一生手の外科医としてのidentityを持ち続けていきたいと思っています。

今枝 敏彦 (いまえだ としひこ) 藤田保健衛生大学公衆衛生学教室

昭和56年名古屋大学卒です。名大分院整形外科赴任中は、舟状骨骨折やキーンベック病の3DCT, MRI, 手関節鏡の仕事をし、Mayo Clinic Biomechanics labに留学中は、母指のCM関節の解剖およびバイオメカの研究に専心致しました。帰国後、手関節鏡と尺骨突き上げ症候群のMRIの研究をしました。その後、労働衛生の仕事を開始しました。数年前にASSHで「手根管症候群は労災か否か」というdebateが取り上げられ、アメリカにおいても重大な問題であります。手根管症候群は作業関連性があるとされていますが、このように作業関連性が疫学上ほぼ確立された疾患はまだ多くなく、これからの課題です。現在は一次予防を目標に、他の上肢における作業関連性筋骨格障害についてバイオメカニクスの検討をしております。日本手の外科学会もglobalizationの影響を必然的に受けざるを得ない状況です。私も微力ながら日本手の外科学会に寄

与するつもりでございますので、宜しく願い申し上げます。

今給黎篤弘（いまきいれ あつひろ） 東京医科大学整形外科

この度、日手会評議員に推挙され大変光栄に存じます。永年に亘り卒前卒後の教育において手の外科学を担当し、指導してきました。21世紀は組織再生医学の進歩により、機能維持・回復・再建が最も重視される手の疾患の治療は大きく変化して来ることは必須であります。患者にとって質の高い医療を提供すべく微力を尽くしたいと思う。そして、大きく夢をもちながら、学生、教室員を教育し、次世代に継ぐ役割を果たしたい。

岩本 幸英（いわもと ゆきひで） 九州大学大学院医学研究院整形外科

九州大学整形外科学教室は、日本手の外科学会の開設以来、長年にわたり学会事務局をあずかりましたので、手の外科という分野には強い思い入れがあります。今回、私が評議員に選出されたことで、教室に手の外科に興味を持つ若い人がひとりでも増えてくれたら、と思っております。

岡島誠一郎（おかじま せいいちろう） 京都府立医科大学整形外科

私は平成元年に京都府立医大を卒業後、同整形外科学教室に入局しました。2年間の研修ののち、すぐに大学院に進みました。当時、平澤泰介教授が教室を主宰されていたこともあり研究テーマは末梢神経の再生ということで、手の外科と関わるようになりました。大学院の間は当時神戸大学解剖学教室（現京都大解剖学教授）の井出千束教授のところ特別聴講生としてお世話になりました。大学院終了後は大学で修練医として平澤教授、玉井和夫講師のもとで主に手の外科の症例を勉強させていただきました。その後、米国East Virginia Medical SchoolのDr Terzisのもとで1年半 research fellowとしてNorfolkで過ごしました。米国留学中は幸運にもlimited licenseを獲得して研究以外に主に腕神経叢損傷の患者の手術に参加していました。遊離筋移植の症例も多くマイクロサージャリーの症例も数多く経験させて頂きました。平成10年4月に帰国と同時に京都府立医大の助手として大学の手の外科班のチーフを務めさせていただき、現在に至っております。第43回の日手会学術集会の会長が平澤名誉教授であったので、日手会の活動の多様さ、大変さも多少なりとも理解しているつもりです。今回日手会の評議員に選ばれ、自分のような若輩者が日手会の評議員という重積を全うできるかと不安を感じておりますが、自分の得意分野を生かして日手会に微力ながらも貢献していきたいと思っています。

岡本 雅雄（おかもと まさお） 新河端病院整形外科

これまで大学において臨床的研究を行ってきましたが、現在は関連病院で主に新鮮外傷症例を扱っております。大学とは違い手の外科のみならず医療全般に携わることが多くなり、これを機に今までと異なった観点から手の外科を見つめ直し、新たな学問的魅力を見いだすことができ、さらに地域医療の貢献に努めればと思います。まだまだ微力ではありますが学会への一助となれるようこれからも研鑽を積み一路邁進してまいりたいと思います。

長田 伝重 (おさだ でんじゅう) 獨協医科大学整形外科

獨協医科大学整形外科学教室昭和60年入局の長田伝重です。この度、伝統ある日本手の外科学会の評議員に選出されたことを大変光栄に思います。

手の外科は研修医の頃より魅力を感じ、教室の坂田 宏先生より手術の手解きを受けました。平成5年(1993)に新潟手の外科研究所にて吉津先生、牧先生のもと研修を行い、平成12年(2000)に聖マリアンナ医大別府先生のご尽力により、テキサス大学およびKleinert Instituteに留学させて頂きました。手の外科についてまだまだ未熟者ですが、本学会の発展のために微力ながら貢献したいと思っております。

柿木 良介 (かきのき りょうすけ) 京都大学大学院研究科整形外科

研修医時代切断指再接着術に接し、微小血管縫合で血流の途絶した組織を生き返らせるその手技に大変感動しました。大学院時代も神経再生と血流との関係を研究し、留学したMayo ClinicのBishop先生も血管柄付き組織移植がお好きで、大変影響を受けました。これからも組織血行再建を考えた手の外科を実践して行きたいと思っております。また若い先生方ともその魅力を分かち合い、日本手の外科学会の発展に少しでも貢献できるよう努力したいと思っております。

釜野 雅行 (かまの まさゆき) 馬場記念病院整形外科

私は昭和62年に福井医科大学を卒業後、大阪市立大学整形外科学教室に入局し、楠正敬先生に師事いたしました。大学での研究テーマはキーンベック氏病と手のOAでした。平成4年に現施設に赴任し、橈骨遠位端骨折の治療をテーマに掲げ、手関節鏡を併用した掌側プレート固定法を行っています。これからは学会の一評議員として、微力ながらも学会の発展に寄与する所存でございます。今後とも諸先生方のご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

上石 弘 (かみいし ひろし) 近畿大学形成外科

この度、第45回日本手の外科学会において平成14年度の評議員に選出され委嘱状を拝受いたしました。昭和49年に新潟手の外科の研修会に参加して以来今日まで形成外科医として、主として四肢の先天異常ならびに外傷を中心として手の外科の診療に携わってきました。この間、昭和50年2月には5才男児の右拇指の再接着手術に成功し、マイクロサージャリーにも鋭意取り組んでまいりました。教室にとりまして大変名誉な事であり、手の外科の診療、教育、研究にも弾みをつけたいと存じます。一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

亀山 真 (かめやま まこと) 東京都済生会中央病院整形外科

昭和60年慶應義塾大学医学部卒業後、整形外科学教室へ入局、その後、済生会神奈川県川島病院で佐々木孝先生に厳しいご指導を受け、これで自分の仕事の基礎が築けたと思っています。現在は、特に糖尿病に伴う手の障害に関する臨床研究を行なっています。昨今は演題数も増加し、qualityの高い演題を評価するのが益々困難な状況で、その解決策として、本学会誌の査読を一層充実させていくことが肝要と考えます。微力ながら、本学会の発展に貢献するつもりですのでよろしくお願い申し上げます。

河野 正明（かわの まさあき） 興生総合病院整形外科

昭和61年愛媛大学を卒業後、同大学整形外科医局員として主に手の外科にたずさわって来ました。その間大学の諸先輩方や、手の外科の研修をさせて頂いた名古屋大学（当時分院）の先生方、中四国手の外科学会で御指導頂いた諸先生方などに支えられて、この大役を仰せつかることができたものと感謝しております。今の自分には分不相応であることも十分承知致しておりますが、一生懸命努めさせていただき所存です。御指導の程宜しくお願いいたします。

木森 研治（きもり けんじ） 医療法人あかね会 土谷総合病院整形外科

昭和56年に広島大学整形外科に入局。津下健哉先生、生田義和先生に手の外科、微小外科を学び、現在、広島市中区にある医療法人「あかね会」土谷総合病院の整形外科部長、ならびに広島手の外科・微小外科研究所副所長として日夜、仕事に励んでおります。今後は本学会の評議員として、手ならびに肘の外科に関する独自のアイデア、新情報をできる限り発信し、日本はもとより海外の手の外科の発展にも寄与できるように努力していく所存です。御指導のほど、宜しくお願い致します。

草野 望（くさの のぞむ） 富永草野病院整形外科

昭和58年順天堂大学を卒業し新潟大学整形外科教室に入局。昭和62年より手の外科班に入り田島達也教授を始め諸先生方の御指導を頂きました。平成5年からは富永草野病院勤務の傍ら新潟手の外科学研究所の吉津孝衛先生の御指導のもとに屈筋腱断裂の基礎的、臨床的研究を行っております。また舟状骨骨折や小児モンテジア骨折の初期診断にも興味を持っております。今後は微力ながら日手会の発展のためにお役に立てればと考えております。

五谷 寛之（ごたに ひろゆき） 大阪市立大学医学部整形外科

昭和63年大阪市大、平成7年同大学院卒、本年7月より整形外科講師。この度伝統ある本学会評議員を委嘱され、身の引き締まる思いです。最近日手会で、手の臨床解剖、肋軟骨移植、舟状骨への血管柄付き骨移植、後尺骨動脈皮弁等発表しており、コンピューター支援手術にも手を染めております。山野名誉教授、豊島元助教授、松田、楠元講師ら同門の先輩の名に恥じぬ様学会の発展に寄与すべく努力する所存です。よろしく申し上げます。

酒井 直隆（さかい なおたか） 宇都宮大学工学部機械システム工学科バイオメカニクス研究室

私は横浜市立大学整形外科教室の出身ですが、昨年横浜市民病院より宇都宮大学工学部バイオメカニクス研究室に移りました。現在は横浜市立大学客員でもあり毎週関東を南北に縦断しつつ、医学と工学の複合領域の研究を進めております。また臨床では音楽家の手の障害に、動作解析も含めて取り組んでおります。今後バイオメカニクスと手の職業疾患の分野を中心に、伝統ある日手会に貢献したいと思っておりますのでよろしく申し上げます。

澤泉 卓哉 (さわいずみ たくや) 日本医科大学整形外科

私は昭和59年、日本医科大学を卒業し、同年日本医科大学整形外科に入局しました。体性感覚誘発電位の研究で学位を取得しましたが、学位の仕事の目処がついた昭和63年頃から、肥留川道雄先生のお手伝いをさせて頂くようになり、その“メス捌き”に魅せられたことが手の外科に興味を持ったきっかけだったように思います。現在、手の外科を中心に、肘関節疾患、骨延長を含めた組織延長の治療を手掛けています。微力ながら本学会の発展に寄与したいと考えております。よろしく願い申し上げます。

清水 克時 (しみず かつじ) 岐阜大学整形外科

1973年京都大学整形外科入局、玉造厚生年金病院で藤川重尚先生にマイクロサージャリー、再接着術を学ぶ。1977年広島大学で津下健哉教授に手の外科を学ぶ。京都大学上羽康夫教授のもとで手の外科診療に従事。小倉記念病院で手の外科を中心に診療。1985年メイヨークリニック J Dobyns 教授, R Linsheid 教授に手の外科を学ぶ。手の外科は機能外科としての性格が明確なので整形外科の概念を学ぶために必須です。私は医学生や一般整形外科医のために岐阜大学整形外科の手の外科に関する教育環境を整備したいと考えています。

白井 久也 (しらい ひさや) 大阪医科大学整形外科

私は昭和60年に大阪医科大学を卒業し、同整形外科に入局しました。大学院時代は骨延長の基礎実験を行い、その後は当科、阿部宗昭教授の指導下に手の外科を勉強してきました。ライフワークは前腕の回旋運動に関する基礎的、臨床的研究で、平成13年にはWest Virginia大学のRyu先生のもとで回旋運動に関する基礎的実験を行うことができました。若輩者ではありますが、ライフワークを中心に手の外科領域の益々の発展に微力を尽くしたいと存じます。

末永 直樹 (すえなが なおき) 北海道大学整形外科

この度は伝統のある日本手の外科学会の評議員に選出を賜り、大変光栄であるとともにこの学会の運営・発展に関し、どこまで貢献できるのか非常に不安な今日を過ごしています。

私は1987年に北海道大学医学部整形外科に入局し、1989年尺側手根伸筋腱の安定化機構の解剖学的研究を行う機会があり、手の外科への興味が一気に増し、1992年に日本手の外科学会へ入会させていただくとともに北海道大学医学部整形外科の上肢グループにて手の外科の基礎および臨床リサーチを行ってきました。現在までの主な研究分野は上肢のスポーツ障害の治療、橈骨遠位端骨折の観血的治療および手関節尺側部痛の病態と治療でした。今後も同領域を中心に未だ未熟で微力ではありますが今後の日本手の外科学会の基礎的・臨床的分野の国際的発展に対し、精一杯努力していきたいと思っています。

高原 政利（たかはら まさとし） 山形大学整形外科

私は、北海道大学と山形大学で整形外科と手の外科の勉強をしました。現在、荻野利彦教授のもとで臨床と研究を行っております。肘関節にも大変興味を持っております。上肢のスポーツ傷害は私が最も心を引きされる分野です。私は、手の外科学会が、肩学会や肘関節研究会と連合して、合同で開催されるようになるとういいなあと感じています。また、私よりも若い先生が、楽しく元気に手の外科をやれるように努力したいと思います。

田原 真也（たはら しんや） 神戸大学形成外科

free flapによる再建術をメインテーマにしています。本学形成外科を担当して5年経過したところです。手の外科の卒前・卒後を通じた若い力の育成に努めるとともに、その重要性についての啓蒙活動にも努力する所存です。

坪川 直人（つばかわ なおと） 新潟手の外科研究所

私は昭和60年新潟大学を卒業後、田島教授の整形外科教室に入局、一般整形外科研修を6年行った後、手の外科に参加しました。田島、斉藤、吉津、柴田、牧といった強面の先輩にしごかれ続け、気が付くと新評議員に選出されておりました。手の外科は多岐にわたっており習得に時間のかかる分野ですが、同時に大変興味深い分野であることを若い整形、形成外科医の皆さんに知ってもらえるよう、口八丁、手八丁で努力していきたいと思っております。

鶴田 敏幸（つるた としゆき） 医療法人 鶴田整形外科

私は卒後研修時に熊本赤十字病院で米満ファミリーと出会い、手の外科、マイクロサージャリーを知りました。

以後、佐賀医科大学にて渡邊教授、忽那両先生の元で比較的自由に手術をさせて頂き、また、全国多くの先生方のところへ行かせて頂きました。

開業して7年になりますが、Louisvilleでの経験は今でも役に立っております。ばね指1つとっても興味深く、奥が深いと、最近強く思っており、まだまだ勉強することが山程ある私ですが、今回日本手の外科学会の評議員になったことで、会及び会員の方々のために少しでもお役にたてれば、と思っております。どうぞよろしくお願い致します。

寺田 信樹（てらだ のぶき） 藤田保健衛生大学坂文種報徳会病院整形外科

昭和61年に慶應義塾大学を卒業し、矢部 裕前教授、内西兼一郎前助教授の御指導のもとで手の外科を勉強し、平成7年にはSwedenのLundborg教授のもとに留学し、末梢神経研究を学ばせて頂きました。その後、平成10年に藤田保健衛生大学坂文種病院に赴任し現在に至っております。幅広く手の外科臨床に携わることはもちろんですが、基礎研究にも積極的に取り組んでいます。今後は日本手の外科学会発展のために微力ながら御協力ができれば幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

内藤 正俊 (ないとう まさとし) 福岡大学整形外科

私は研修医の頃に手の外科を勉強し、First Authorとして最初に国際的に発信した基礎的研究は腱の栄養に関するもの (The Hand, 1983), 臨床的研究は透析患者の手根管症候群に関するもの (J. Hand Surg., 12B, 1987) でした。現在も興味があり、『手の機能』の荒廃が人間の尊厳の維持を著しく損なうことを認識しております。評議員となって手の外科の教育や研究を発展させる所存です。

中尾 悦宏 (なかお えつひろ) 名古屋大学運動形態外科学手の外科学

昭和62年に名古屋大学を卒業し、名古屋掖済会病院にて木野義武先生に手の外科の基礎・外傷を学び、平成5年より名古屋大学にて中村蓼吾先生のもと手関節疾患を中心に手の外科を勉強しております。平成7, 8年には、New York州立大学Syracuse校に留学し、Andrew Palmer教授、Walter Short先生のもと手関節疾患の臨床を学び、手根管内圧の研究をいたしました。今回、評議員に加えていただき誠にありがとうございます。学会の発展に微力ながら少しでもお役にたてればと考えております。よろしくお願いたします。

西川 真史 (にしかわ しんじ) 弘前大学整形外科

昭和57年に弘前大学整形外科医局に入局し、この春大学の医局に復帰しました。その間に諸先輩方に整形外科一般の様々な指導をうけ、その経験が手の外科医として大いに役立っていると考えております。手の外科の診断や治療は日進月歩の勢いで進歩してきております。これからもその流れに取り残されないように研鑽を重ね、評議医員として本学会のために微力ではありますが全力で努力するつもりですのでよろしくお願いたします。

信田 進吾 (のぶた しんご) 東北労災病院整形外科

私は昭和58年東北大学卒業で、研修は国立水戸病院で主に外傷を学び、昭和63年より4年間、東北大学整形外科医局で桜井実前教授、宮坂芳典先生の御指導のもとに腕神経叢麻痺の臨床研究 (学位論文) を行いました。以後は東北労災病院、米国キャンベルクリニック (臨床研修)、塩釜液済会病院を経て平成9年より東北労災病院に勤務となり、肘部管症候群、手根管症候群等の末梢神経障害の診療と電気診断学的な臨床研究を行ってきました。今後も、障害程度の判定と予後の予測に関して探求の余地のある末梢神経障害ならびに外傷の分野での研究を続け、日本手の外科学会の会員増加と充実のために少しでもお役に立てますよう、努力してゆく所存です。

福本 恵三 (ふくもと けいぞう) 埼玉手の外科研究所

私は1986年に慈恵医大を卒業後、形成外科の研修を始めました。学生時代に丸毛英二先生の講義を受け、手の持つ複雑さ、精緻な機能に興味を持ったためです。その後児島忠雄先生に手の外科の指導を受け、2000年から埼玉手の外科研究所に勤務しております。特に興味のある分野は、皮膚軟部組織の再建、先天異常などです。手は高い表現力を持つ美しい器官です。形成外科医としての整容的な意識を持った手の外科医でありたいと思っています。

牧野 正晴（まきの まさはる） 済生会新潟第二病院整形外科

1975年に新潟大学医学部を卒業し、田島先生始め手の外科研究班の緒先輩およびSwanson先生にご指導をいただきました。自分なりに研究を継続してきましたが、この度評議員に加えていただき活躍の場が広がったことをありがたく感じています。手の外科はその導入期とmicrosurgery発展期の2回飛躍時期があり、現在は低迷期と言えるかも知れません。しかしそれは過去の蓄積から、それに拘泥せずに、新しい展開を行なえる時だと思います。文献を読んでもそれに縛られず、自分のアイデアを生かした研究をすることで先輩方に恩返しをしたいと思います。

正富 隆（まさとみ たかし） 大阪厚生年金病院整形外科

昭和60年に大阪大学を卒業し、卒後2年より手の外科の研鑽を続けて参りましたが、このたび諸先生方のご指導、ご鞭撻により日本手の外科学会の評議委員に御推挙いただきました。身に余る光栄と深く感謝しますとともに、責任の重大さに身の引き締まる思いでございます。微力ではありますが手の外科学会の発展に少しでも寄与できるよう、そして手の外科が総合的な上肢機能再建外科としてその専門性がさらに世に認知されるよう尽力して参りたいと思います。会員諸氏の叱咤激励のほど、よろしくお願い申し上げます。

松下 和彦（まつした かずひこ） 聖マリアンナ医科大学整形外科

私は1980年に杏林大学医学部を卒業し、聖マリアンナ医科大学整形外科に入局いたしました。長尾悌夫先生、別府諸兄先生に手の外科についてご指導いただき、米国Louisville Hand Surgeryへの2年間の留学、第1回日米手の外科トラベリングフェローとしてアメリカ西海岸にある手の外科の施設を訪問する機会を得ました。この経験を生かし、日本手の外科学会のさらなる発展に少しでも貢献できればと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

松下 隆（まつした たかし） 帝京大学整形外科

最もメカニカルな科であり、治療の善し悪しが誰の目にも分かりやすいとの理由で整形外科を選択した私にとって、手の外科は魅力ある専門分野のひとつでした。しかし、手の外科に没頭する機会が無いまま27年が過ぎてしまいました。これから私自身が一流の手の外科医になることは不可能ですが、多くの有能な手の外科医を育て日本手の外科学会を発展させるため、できる限りの努力をしたいと考えております。どうぞよろしく願い申し上げます。

松村 嵩史（まつむら たかし） 済生会宇都宮病院整形外科

1984年東北大学医学部卒業後、慶応義塾大学整形外科学教室に入局しました。内西兼一郎先生、伊藤恵康先生、堀内行雄先生の手術に感銘を受け、手の外科を志しました。また矢部 裕前教授の指導の下、先天異常発生、頸髄損傷麻痺手再建の研究をしました。最近手術のかたわら、手の疾患にも応用できる漢方を目指して勉学をはじめました。患者主体の医療が叫ばれる中、個々の患者にとって最も満足のいく治療法を選択してあげることが医師の責務と考えております。そのためには医師自身が、保存的、手術的治療に関わらず治療法の選択肢を数多く持つ必要があると思います。

松村 一（まつむら はじめ） 東京医科大学形成外科

手の外科学会評議員に選出頂き、身に余る光栄に存じます。臨床では手部熱傷の治療、各種皮弁移植、交感神経性ジストロフィーなど、基礎では神経虚血・再生などを仕事にしてきました。まだまだ未熟者ではございますが、今後は皆様のご指導ご鞭撻の下、形成外科医として手の外科にたずさわりたい、会員の皆様のご期待に応えたいと存じます。

丸山 優（まるやま ゆう） 東邦大学付属大森病院形成外科

形成外科学講座主任を責としています。整形外科学教室員の先生方と共に日本手の外科学会に微力ではありますが、貢献したいと思っています。

三上 容司（みかみ ようじ） 横浜労災病院整形外科

昭和58年東大卒。東大整形外科へ入局後、腕神経叢損傷を中心とする末梢神経損傷、障害の診療、研究を中心に活動して参りました。Evidenceに基づき、Ethicsに留意しつつ、Economicsにも配慮した診療を行い、Errorを減らし、同時にEducationできるよう努力したいと思います。ところで、ハイリスク・ローリターン化しつつある臨床医学に見切りをつける、あるいは、興味を失う若い医師が増えつつあると感じているのは、私だけでしょうか。若い先生たちに、手の外科、あるいは、末梢神経学の魅力を少しでも伝えられればと思います。会員の皆様のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

水谷 一裕（みずたに かずひろ） 東邦大学整形外科学第二講座

この度、日本手の外科学会の評議員を委嘱いただきました。生田理事長を初め、関係諸先生方に心より深謝致します。浅才非学の身ですが、教室ならびに本学会のさらなる発展のために精一杯尽力させていただきます。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

村瀬 剛（むらせ つよし） 大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学

昭和62年阪大卒業後、当時香川医科大学の助教授をされていた多田浩一先生のもとで手の外科の基礎を学び、91年から1年間、パリのフランス手の外科研究所でレジデントとして勤務。帰国後は星ヶ丘厚生年金病院で河井秀夫先生と腕神経叢損傷治療に取り組んだのち、国立大阪病院、関西労災病院などで臨床にたずさわってきました。現在は大阪大学で研究生生活ですが、今後も日本の手の外科に貢献できる仕事をしたいと考えておりますのでよろしくお願い致します。

村松 慶一（むらまつ けいいち） 山口大学整形外科

伝統ある日本手の外科学会の評議委員に選出されました事を誇りに思っております。私は昭和62年山口大学整外に入局し、土井一輝先生の御指導に導かれ手の外科の道へ入りました。研究は運動器同種移植で四肢移植の免疫寛容を探索しており、Melbourne大学のProf. Morrison、Mayo ClinicのProf. Bishopの元で学びました。現在議論となっている手の同種移植は解決しなければならない問題が残されています。ライフワークとして取り組んでいく所存です。

.....お知らせ.....

手の外科研修施設一覧

施設番号	施設名	研修責任者	研修内容	手の外科年間手術件数	スタッフ数		
	郵便番号・住所・電話番号	研修期間		推薦者	その他条件		
1	北海道大学医学部附属病院整形外科 060-8638 札幌市北区北15条西7丁目 (011-716-1161)	三浪明男	手の外科一般, マイクロサージャリー	200	3名		
		3カ月, 1年		所属長	卒後5年以上		
2	大阪労災病院 591-8025 堺市長曽根町1179-3 (072-252-3561)	政田和洋	手の外科一般, リウマチ手	400	3名		
		3カ月		不要	認定医師		
3	山口県厚生連小郡第一総合病院 754-0002 山口県吉敷郡小郡町下郷862-3 (083-972-0333)	土井一輝	手の外科一般, マイクロサージャリー	700	3名		
		3,6,12カ月		所属長	卒後5年以上		
4	新潟手の外科研究所 950-0965 新潟市新光町1-18 (025-283-0306)	吉津孝衛	手の外科一般, マイクロサージャリー(1~2週マイクロ技術研修あり)	1700	3名		
		4カ月, 3カ月以下		不要	条件なし		
5	済生会山形済生病院 990-8545 山形市沖町79-1 (0236-41-0849)	清重佳郎	外傷, 手の外科	200	1名		
		4カ月		不要	卒後3~4年		
6	東京手の外科 スポーツ医学研究所 192-0002 八王子市高槻町360 (0426-92-1115)	山口利仁	上肢外傷	600	2名		
		6,12カ月		不要	卒後6年以上		
7	埼玉手の外科研究所 355-0072 東松山市石橋1721 (0493-23-1221)	児島忠雄	手の外科一般, マイクロサージャリー, 特に皮膚軟部組織の再建	400	3名		
		3,6カ月, 1年		所属長	卒後5年以上		
8	聖隷浜松病院 手の外科・マイクロサージャリーセンター 430-8558 浜松市住吉2-12-12 (053-474-2222)	斎藤英彦	手の外科全般(麻痺手, リウマチ手を含む)	900	4~5名		
		クリニカルフォロー1年間				施設長 科長	卒後6年以上
		オブザーバー 毎週回6~12ヵ月					
		ピジター任意					
9	鈴鹿回生総合病院 513-0836 鈴鹿市国府町 112-1 (0593-75-1212)	藤澤幸三	上肢外科外来, ハンドリハビリ, 手術参加, 三重大学上肢外科グループ抄読会	680	3名		
		3カ月~6カ月				所属長, 研修許可書	卒後3年以上
10	医療法人あかね会 広島手の外科・微小外科研究所 730-0811 広島市中区中島町 9-5 三津石ビル3階・4階 (082-544-1227)	津下健哉	手の外科一般, マイクロサージャリー	350	2名		
		3カ月~6カ月				所属長	卒後3年以上

研修希望者は各研修施設に直接、申請、交渉を行ってください。教育研修委員会および日本手の外科学会は研修医の申請、および研修に関しては一切、関与いたしません。

日本手の外科学会 教育研修ビデオライブラリー

2002年度最新版を含めビデオライブラリーが揃っております。

ご希望の方は、実費（1本3,000円）で頒布いたしますので、事務局までお申込みください。

巻数	タ イ ト ル	講 師
1	腱移行術	津下 健哉
2	手の外科医に必要な皮弁の挙上法 橈側前腕皮弁 逆行性後骨間皮弁 外側上腕皮弁 嵐径皮弁 静脈皮弁	土田 芳彦 福居 顕宏 金谷 文則 関口 順輔 鈴木 正孝
3	橈骨遠位端骨折に対する種々の手術的治療法 粉碎関節内骨折に対する創外固定および補助観血整復・骨移植術 Intrafocal pinning法 橈骨遠位端骨折に対する創外固定法	斎藤 英彦 外間 浩 玉井 和夫
4	鏡視下手根管開放術 One-portal 法 Two-portal 法	奥津 一郎 木村 元
5	手関節鏡 手関節鏡の実際 手関節鏡視下手術の実際 橈骨遠位端関節内骨折の鏡視下整復・固定術	玉井 和夫 塩之谷 香 土井 一輝
6	Dupuytren 拘縮の手術 有茎血管柄付き DIP 関節を利用した指 PIP 関節再建のコツ	福居 顕宏 黒島 永嗣
7	Herbert Screwによる舟状骨偽関節手術	井上 五郎
8	腕神経叢損傷全型麻痺の再建手術：Double Free Muscle Transfer法(新版)	土井 一輝
9	リウマチ手関節の手術	政田 和洋

2002 年度最新版

10	母指再建術 母指化術による母指の再建 足趾関節移植を用いた低形成母指の再建	川端 秀彦 柴田 実
11	母指再建術 橈骨付き逆行性前腕皮弁による母指再建 Wrap-around flap法	稲田 有史 土井 一輝
12	遊離筋膜脂肪弁移植を用いた先天性近位橈尺骨癒合症の授動術	金谷 文則
13	手の外科手術手技	津下 健哉 木森 研治
14	手の外科手術手技	津下 健哉 木森 研治
15	手の外科手術手技	津下 健哉 木森 研治
16	手の外科手術手技	津下 健哉 木森 研治

学 会 案 内

国内

第29回 日本マイクロサージャリー学会学術集会（会長 金谷文則）

会 期：2002（平成14）年11月21日（木）・22日（金）

会 場：沖縄コンベンションセンター

特別講演：土井一輝先生（小郡第一総合病院院長）「マイクロサージャリーの現状と未来」

招待講演：Dr. Fu-Chen WEI（Chang Gung Hospital, TAIWAN）

Dr. David CC CHUANG（Chang Gung Hospital, TAIWAN）

Dr. Duke Whan CHUNG（Kyung Hee University Hospital, KOREA）

シンポジウム：「欠損手・指の再建」「頭頸部再建 1」「頭頸部再建 2」

パネルディスカッション：「小児マイクロサージャリー」「腕神経叢損傷再建」

事務局：〒903-0215 沖縄県中頭郡西原町字上原207番地

琉球大学医学部整形外科教室 第29回日本マイクロサージャリー学会事務局

TEL:098-895-1174 FAX:098-895-1424

登録事務局：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 有限会社ヒズ・ブレイン内

TEL:052-836-3511 FAX:052-836-3510

E-mail:micro29@his-brain.co.jp

第20回中部日本手の外科研究会（会長 西源三郎）

会 期：2003（平成15）年1月25日（土）

会 場：名古屋市中小企業振興会館（吹上ホール）

名古屋市千種区吹上2-6-3（Tel：052-735-2111）

特別講演：『爪の再生を考慮した指尖損傷の治療と再建』

新潟大学形成外科 柴田 実 教授

主 題：1．爪損傷の治療法

2．手指伸筋腱損傷の治療法

3．手の骨・軟部腫瘍の治療法

4．指関節内骨折の治療法

5．指骨・中手骨の骨延長術

連絡先：第20回中部日本手の外科研究会

〒498-8502 愛知県海部郡弥富町 愛知県厚生連海南病院

TEL:0567-65-2511 FAX:0567-67-3697

E-mail:gakkai-te@kainan.jaai-kosei.or.jp

第17回東日本手の外科研究会（会長 岡 義範）

会 期：2003（平成15）年2月14日（金）

会 場：大田区民ホール・アプリコ

主 題：1．橈骨遠位端骨折の手術療法（創外固定を含む）

2．腕神経叢損傷の診断と治療・最近の進歩（分娩麻痺を含む）

3．診断・治療の新しい試み

事務局：東海大学医学部附属大磯病院整形外科

TEL:0463-72-3211 FAX:0463-72-2256

URL <http://square.umin.ac.jp/ejssh17>

第15回日本肘関節研究会（会長 龍順之助）

会 期：2003（平成15）年2月15日（土）

会 場：コクヨホール

特別講演：Prof. Beat R. Sinmen

Schulthess Clinic, Zürich Switzerland

- 主 題： 1 . 肘関節機能評価表
 2 . リウマチの肘関節の治療
 3 . 肘周辺の絞扼神経障害
 4 . 肘のスポーツ障害

事務局：日本大学医学部整形外科
 TEL:03-3972-8111 FAX:03-3972-4824
 E-mail:elbow15@his-brain.co.jp
 URL <http://square.umin.ac.jp/elbow15>

第46回日本手の外科学会（会長 中村 蓼吾）

会 期：2003（平成15）年4月18日（金）～20日（日）
 会 場：名古屋国際会議場 名古屋市熱田区熱田西1-1（Tel：052-683-7711）
 シンポジウム： 1 . Advanced Technologyと手の外科（演者指定）
 2 . 手関節障害への挑戦と展望

パネルディスカッション：

- 1 . 手の外科の社会対応 - 専門医制を考える（演者指定）
- 2 . 末梢神経外科の新戦略
- 3 . CRPS（RSD）の診断と治療（演者指定）
- 4 . 先天異常手治療の争点と展望
- 5 . 手のリハビリテーションの工夫

ビデオシンポジウム：

キーンベック病の手術

連絡先：登録事務局（有限会社ヒズ・ブレイン内）
 TEL:052-836-3511 FAX:052-836-3510
 E-mail:nagoya46@jssh.gr.jp
 URL <http://jssh.gr.jp>

5th APFSSH（第5回アジア太平洋手の外科学会）

会 期：2003（平成15）年11月27日（木）～29日（土）
 会 場：大阪国際交流センター
 会 長：生田義和
 事務局：〒468-0063 名古屋市天白区音聞山1013 有限会社ヒズ・ブレイン内
 TEL:052-836-3511 FAX:052-836-3510
 E-mail:apfssh@jssh.gr.jp
 URL <http://jssh.gr.jp/50pfssh>
<http://www.apfssh.org>

編集後記

今回は、広報委員会担当理事が藤澤幸三先生より伊藤恵康先生に引き継がれて初めての日手会ニュースです。藤澤先生、長い間ご指導ありがとうございました。日本手の外科学会では新評議委員が多数選出され、それぞれの抱負がこの中に掲載されております。また一つ、日本手の外科学会に新たな流れが始まろうとしています。日手会グッズの出来映えも好評で、これも皆様のご協力の賜物と信じております。この内容は、日本手の外科学会ホームページにも掲載されますので、そちらの方もどうぞご覧ください。日手会ニュースに記事の掲載を希望されます方は、どうぞ事務局までご連絡ください。

（文責：青木光広）